



早稲田大学 GS センター

活動報告書

第 1 号

2018 年 4 月

目次

はじめに	2
1 GS センターについて.....	3
2 年間の活動	5
3 学外活動について	11
4 年間利用者数および利用目的	13
5 取材件数および取材内容	16
6 相談件数および相談内容	18
7 次年度に向けた課題と展望	19
8 学生スタッフの声	21
おわりに	25

2017 年度

はじめに

GSセンター課長：関口 八州男

2017年4月、早稲田大学GSセンター(Gender and Sexuality Center)は、学生支援に主眼をおいた多様性を推進する機関として、国内他大学に先駆けて設置されました。学生からの提案により、大学は当センターの設置を決めましたが、他大学に前例がないため、準備段階から、ひとつひとつ、手探りで進めざるを得ませんでした。準備段階ではとても想定できなかったことが、開室後、数多くありましたが、ひとつ、嬉しい誤算であったのは、想定を遥かに超えた利用学生が当センターに来室してくれたことです。誠にお恥ずかしい話ですが、私はこれほどの利用学生が来室するとは正直、思っていませんでした。当センターに来室するのは、特定の学生のみであり、それでも居場所作りの役割は担えるのでは、という程度に考えていました。ところが、多くの学生が様々な目的で来室し、日々、賑わいのある、とても活気溢れた居場所作りを実現することができました。私はこのような素晴らしい居場所作りに大切なのは、「人」であると今、改めて感じています。当センターの中心として、活躍してくれた、専門職員の大賀さん、渡邊さん、それを支えてくれた学生スタッフの皆さん、私と共に兼務として、運営に協力してくれた布施さんに感謝します。また、スチューデントダイバーシティセンター長であられる、三神弘子教授におかれまして、GSセンターの活動を常に温かく見守りつつ、ポイントを的確にご指導いただいたことに感謝申し上げます。更に、学生の多様性を支援する、学生部スチューデントダイバーシティセンターの仲間である、ICC（異文化交流センター）の皆さん、障がい学生支援室の皆さん、また、本学のダイバーシティ推進を担っている、ダイバーシティ推進室の皆さんにおきまして、GSセンターの活動をいつも応援いただき、大変、心強かったです。ありがとうございました。

激動とも言える、この1年間の活動をまとめることにより、改めて、当センターの活動を振り返りつつ、多くの教育機関、企業、公共団体等の皆様方にご覧いただき、それぞれの活動において、多様性を支援するための一助になればと思います。特に国内他大学におきまして、当センターと同様の組織が立ち上がるきっかけになれば、この上ない喜びとっております。学外機関の多くの皆様方との連携を今後も強めていきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

当センターの運営において課題は多いのですが、できる限り、正直に記載しました。課題に直面した際、各メンバーが理想を掲げる中、互いに徹底的に議論することにより、全員の合意の下、常に工夫しながら、課題を克服すべく、運営していきました。このことは私自身、とても勉強になりました。今後も、多くの皆様方からの御意見をいただきつつ、学生の多様性を支援するためのあるべき姿を追い続け、多くの学生に愛されるセンターを目指してまいります。ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

1 GSセンターについて

(1) 設立の経緯

早稲田大学は、2032年に創立150周年を迎えるにあたり、「WASEDA VISION 150」という大学の中長期計画を2012年に発表した。その核心戦略のひとつに、「大学の教育・研究への積極的な学生参画の推進」を掲げ、学生参画を促進していく中で、学生が大学に対して、公的に提案を行うべく、「Waseda Vision 150 Student Competition」が毎年開催されることとなった。そこで、『日本初！LGBT学生センターを早稲田に！』と題した企画（チーム名：ダイバーシティ早稲田）が2015年3月の「Waseda Vision 150 Student Competition」にて総長賞を受賞した。これをきっかけに、学内各箇所及びLGBTサークル等が連携し、検討を重ねた結果、2017年4月に早稲田大学学生部にGSセンターが設立された。このようにGSセンターは大学主導で組織されたのではなく、学生の提案により、新しく組織されたことが大きな特徴である。

(2) 組織体制

GSセンターは、早稲田大学学生部の外局である「スチューデントダイバーシティセンター」内のひとつの担当箇所として設置された。学生部ではすでに、ICC（異文化交流センター）と障がい学生支援室が設置されており、学生部内のひとつの担当箇所として活動していた。しかし、GSセンターの設置に伴い、学生の「多様性」を尊重し、学生生活を支援すべく、これらの箇所を統合し、「ダイバーシティ」をキーワードに新たな組織として「スチューデントダイバーシティセンター」が設置された。

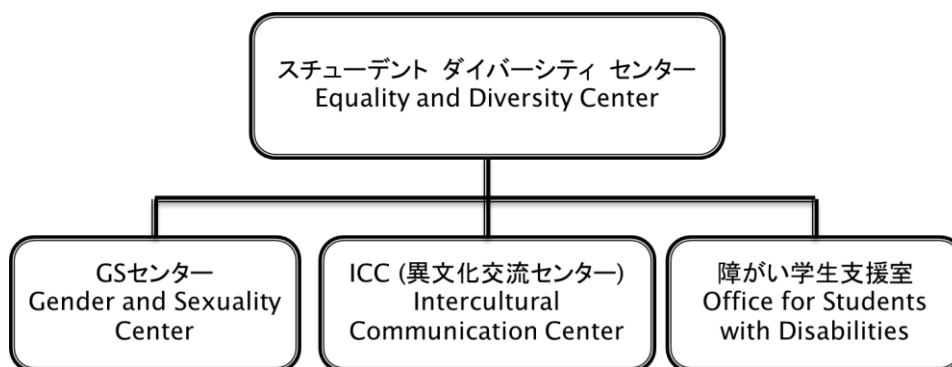


図 1-1. スチューデントダイバーシティセンターの組織図

(3) 設置理念

■ スチューデントダイバーシティセンターの共通理念

早稲田大学は、性別、障がいの有無、性的指向・性自認、国籍、エスニシティなどに関わらず、大学内に多様な個性が共存し、それぞれの目線で学習、教育・研究・就労に関わることにより、大学の更なる進化につながる新たな発想が生まれるようなアカデミック・コミュニティの形成を目指している。そのために、スチューデントダイバーシティセンターでは、次の2つの理念に沿って具体的取り組みを推進していく。

- ・大学生生活全般において不利益を被りうる多様なマイノリティ学生が安心して学業に専念できる学生生活環境の確保
- ・大学に集う全構成員が多様な価値観や生き方を受容するキャンパスづくりの推進

■ GS センターのミッション

GS センターは、セクシュアルマイノリティ学生およびその支援者のホームグラウンドであるとともに、ジェンダー・セクシュアリティに関心のある全ての人々が自由に利用できるリースペースとなっている。この点を踏まえ、以下の3つの機能を軸とした運用を行う。

1. 安心・安全に相談ができるクローズドな相談支援センター
2. 知識にアクセスできるオープンなリソースセンター
3. イベント等を実施するセミオープンなコミュニティセンター

(4) 勤務体制・サポート内容

■ GS センターの勤務体制

専任職員2名(内1名管理職)は常駐でない勤務、ジェンダー・セクシュアリティに関する知識のある専門職員2名は交替による常駐勤務、学生スタッフ7名は交替による常駐業務を行っている。通常、午前中は専門職員1名及び専任職員1名による2名常駐、午後は専門職員1名及び学生スタッフ1名による2名常駐で勤務している。

■ GS センターのサポート内容

職員の守秘義務のもと、相談者のプライバシーが守られた空間で以下のサポートを行う。また、個々人のニーズに応じて、学内・学外の適切な機関をご紹介します、可能な範囲で連携しサポートする。

- ・ジェンダー・セクシュアリティに関する疑問や質問に、可能な限り回答する。
- ・学生生活で感じたちょっとした違和感や心配事、不自由などについて可能な範囲で聞く。

【相談の例】

- ・セクシュアリティや恋愛の在り方で悩んでいる
 - ・ALLY(支援者)として活動したいが、どうしたらいいかわからない
 - ・ジェンダー論のレポートのことで相談したい
 - ・LGBTコミュニティの友人関係のことで悩みがある
- など

2 年間の活動

GSセンターでは、ジェンダー・セクシュアリティに関する勉強会やテーマ別ランチ・カフェイベントだけでなく、学生サークルや学内他箇所と連携したイベントなどを行った。

(1) GSセンターコラボレーションイベント

月	日	種別	イベントタイトル	参加者
4月	-7月 末	協力	ジェンダー・セクシュアリティ ブックフェア 【主催】早稲田大学生生活協同組合ブックセンター 【協力】GSセンター	-
	18日	共催	公開講座「多様な生き方を受容すること-LGBTQをめぐる米国の現状から」 (*1) 【主催】ダイバーシティ推進室 【共催】スチューデントダイバーシティセンター 【後援】早稲田大学校友会 【協力】全米アジア諸島系クィア連盟(NQAPIA)、PFLAG、LGBT 稲門会、ダイバーシティ早稲田(学生団体)	140名
5月	16-22日	共催	WASEDA LGBT ALLY WEEK (*2) 【共催】GSセンター、イベント企画サークル qoon (学生団体)、ICC、ダイバーシティ早稲田 【後援】NPO 法人 ReBit、学生生活課、LGBT 稲門会	609名
6月	30日	共催	『ハートストーン』試写会～映画を見てLGBTQについて考えよう～ 【共催】GSセンター、ICC 【協賛・協力】株式会社マジックアワー	38名
7月	3-7日	共催	1/13 PROJECT ～早稲田には、まだ向き合っていない「変」がある～ (*3) 【共催】早稲田大学広告研究会(学生団体)、GSセンター 【後援】学生生活課	135名
	5日	協力	ICC トークセッション「日本のLGBT社会、あなたにはどう見える？当事者の海外・企業の経験をもとに」 【主催】ICC 【協力】GSセンター	49名
9月	30日	共催	映画「ゲイビーベイビー」を観て多様な家族の在り方について考えよう 【共催】GSセンター、NPO 法人ピアフレンズ、Franent	70名
11月	8日	共催	「ジョージ・タケイ」を知る ～ブロードウェイ俳優×日系アメリカ人×ゲイ～ (*4) 【主催】ICC、GSセンター 【協力】ダイバーシティ推進室、学生生活課、早稲田大学公認サークル SEIREN、THEATER LIVE JAPAN LLC. EMA 日本、SPC peak performance	531名
	10日	共催	公開講演会「ジェンダーを超えて自分らしく生きられる社会～男女平等・LGBTQ に関するスウェーデンの取り組み～」 (*5) 【主催】ダイバーシティ推進室 【共催】早稲田大学ジェンダー研究所、GSセンター 【後援】ICC 【協力】スウェーデン大使館	201名
合計動員数				1,773名

- *1 活動報告 URL : <https://www.waseda.jp/inst/diversity/news/2017/04/27/2528/>
- *2 活動報告 URL : <https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2017/06/05/441/>
- *3 活動報告 URL : <https://www.waseda.jp/inst/weekly/attention/2017/07/19/31955/>
- *4 活動報告 URL : <https://www.waseda.jp/inst/weekly/attention/2017/11/29/38601/>
- *5 活動報告 URL : <https://www.waseda.jp/inst/diversity/news/2018/01/10/3349/>

コラボレーションイベントでは、センター開設初年度ということもあり、ICC やダイバーシティ推進室など学内の部署や、学生公認サークルとコラボレーションしたイベントを開催することができた。また、映画関連のイベントでは学外の企業や団体と協力し合いイベントを実施することができ、多くの参加者にジェンダー・セクシュアリティに関して考えるきっかけを与えることができた。特にダブルマイノリティについて取り扱ったイベントである『「ジョージ・タケイ」を知る ～ブロードウェイ俳優×日系アメリカ人×ゲイ～』では、大隈講堂に多くの来場数を迎え、一般の方にも高い関心を持ってもらえるような魅力的なイベントが実施できたといえる。

(2) GS センター主催イベント

月	日	イベントタイトル	参加者
5月	22-24日	ランチ会 (WASEDA LGBT ALLY WEEK 内企画)	19名
7月	7日	ランチ会 テーマ「リア充/非リア」	4名
	14日	ランチ会 テーマ「らしさって何？」	9名
	21日	ランチ会 テーマ「ファッション」	10名
	28日	ランチ会 テーマ「出会い」	9名
8月	5-6日	オープンキャンパス個別相談会	13名
9月	29日	ランチ会 テーマ「家族」	10名
10月	16日	「された」で考えるカミングアウト	3名
	23日	「された」で考えるカミングアウト ※台風のため中止	-
	25日	ランチ会 テーマ「好きって何？」	8名
	30日	「された」で考えるカミングアウト	0名
11月	8日	ランチ会 テーマ「ホモネタ」	5名
	22日	ランチ会 テーマ「家事」	6名
	28日	「あだ会」 ジェンダー・セクシュアリティについてあーだこーだ言う会	7名
12月	11日	LGBT 就活交流会 (*1)	8名
	18日	ランチ会@所沢キャンパス テーマ「好きって何だろう？」	4名
	19日	「あだ会」 ジェンダー・セクシュアリティについてあーだこーだ言う会	4名
	20日	ランチ会 テーマフリー	7名
	21日	ランチ会@西早稲田キャンパス テーマ「好きって何？」	2名
1月	17日	出張オフィスアワー	10名
合計参加者数			138名

- *1 活動報告 URL : <https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2017/12/22/962/>

GS センター主催イベントの概要

- ◆ ランチ会：学生団体「ダイバーシティ早稲田」と共催のイベント。ランチをしながらテーマトークを行う。
- ◆ オープンキャンパス個別相談会：オープンキャンパスで来訪した高校生や保護者の方に GS センターの取り組みについて紹介や相談を受ける。
- ◆ 「された」で考えるカミングアウト：カミングアウトを受けた側の気持ちを話し、共有する。
- ◆ 「あだ会」ジェンダー・セクシュアリティについてあーだこーだ言う会：雑誌や本の異性愛主義や男女二元論に対して突っ込みを入れていく。
- ◆ LGBT 就活交流会：早稲田の当事者の先輩に就活に関する話をさせていただき、参加者と交流する。
- ◆ 出張オフィスアワー：学内の教職員にあるテーマに関して、話をさせていただく。

GS センター内の主催イベントは、学生スタッフが企画したものであり、それぞれの学生スタッフの個性や問題意識を活かしたイベント内容となった。「ランチ会」では、様々なテーマについて語り合うことで、参加者にとってそれぞれの価値観や考え方について知るきっかけとなる場を提供できた。「オープンキャンパス個別相談会」では、高校生と交流をすることで、ジェンダーやセクシュアリティに関する知識や GS センターの取り組みについて紹介をしたが、高校生の意識や関心の高さに職員側が驚かされる場面が多かった。

このように、GS センター内で様々なイベントを多様な切り口から実施することにより、ジェンダー・セクシュアリティについて専門的な知識がなくても、普段の生活でジェンダーについて悩んだり、疑問を感じている学生を巻き込み、敷居が低く、かつ、学びのあるイベントを実施することができた。また、イベントへの参加を通じ、GS センターに定期的に来室する学生数や相談に来る学生の増加につながり、学生の居場所作りであると共に相談の場としての認知につながった。

(3) 参加者の声 (一部抜粋)

- WASEDA LGBT ALLY WEEK (2017/5/22-24 開催)





- ・この場の誰もが誰をも否定しない話し方をされていて、なんだか泣きそうになった。
- ・心が少し軽くなった気がしました。講演会に来てよかったです。

■ 『ハートストーン』試写会～映画を見てLGBTQについて考えよう～(2017/6/30 開催)



- ・実際にLGBTQについて発信する側の声を聴けてよかった。「発信しているが悩みがなくなったわけではない」という言葉が印象的だった。
- ・普通でいなくてはいけない社会を少しでも変えていけたらいいと思った。

■ 1/13 PROJECT ～早稲田には、まだ向き合っていない「変」がある～ (2017/7/3-7 開催)



- ・私は LGBT ではないけれど、自分の環境を自分でえらび、様々な悩みと戦ってきたことに自信を持ってました、ありがとうございました。
- ・日本はまだまだ LGBT に対し遅れているなと思った。私の周りにもいるかもしれない LGBT についてもっと知り、理解したい。
- ・偏見を持っていないつもりだったけど、もっと知らなきゃいけない、と気づくことができました。

- 映画「ゲイビーベイビー」を観て多様な家族の在り方について考えよう (2018/9/30 開催)
 - ・同性パートナーの子供という、今まで「同性パートナーが子供を持つこと」という議論におきざりにされてきた彼・彼女らについて焦点を当てた新しい映画でした。この映画を観てあらためて子供たちが抱える問題の多くは「親が同性パートナーであること」に関係がないということでした。いつも同性パートナーの子供は「不幸だ」と言われがちですが多くの人がこの映画を観て考えを改めて欲しいなと思います。
 - ・同性カップルの是非ではなく、子供たちの”社会とのたたかい方、向き合い方”に焦点が当たっていたことが面白かったです。セクマイ関係の人だけでなく、子育てに悩んでいる人たちや子供たち当人にも広く見てほしい映画でした。(逆に言う「セクマイがテーマの映画!」とだけ告知されているともったいない映画だなとも思いました)
 - ・ガス (※映画登場人物) の「みんな同じ考えじゃつまらない〜」の部分が印象に残った。同じ考えでなくとも受け入れるということは、私にとっても難しく感じるがとても勇気もらった。

- 「ジョージ・タケイ」を知る ～ブロードウェイ俳優×日系アメリカ人×ゲイ～ (2017/11/8 開催)



- ・マイノリティーとしての生き方についてお話を聞くことができ、大変ためになりました。
- ・ Very fun, enjoyable, and informative
- ・たくさんの勇気と元気がもらえました。自分にもマイノリティー性は多くありますが、少しずつ戦い、大切にしていきます。

3 学外活動について

(1) Tokyo Rainbow Pride 2017 (2017/5/6-7 於 代々木公園)



性の多様性を啓発し、LGBTをはじめとする性の多様性を祝う「東京レインボープライド2017」に参加した。出展ブースでは、早稲田大学の卒業生組織「LGBT 稲門会」、学生公認サークル「GLOW」や学生団体「ダイバーシティ早稲田」と連携し、早稲田大学のダイバーシティに関する取り組みについての紹介や、「W」のフェイスペイントを行った。来訪者は早稲田大学に関連する方だけでなく、高校生から小さなお子さんを持つ保護者と数多く、パレード参加も通じて早稲田大学の取り組みを幅広く周知することができた。

(活動報告：<https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2017/05/11/347/>)

(2) RAINBOW CROSSING TOKYO 2017 (2017/10/21 於 ベルサール飯田橋ファースト)

「LGBT の人も LGBT でない人も、自分らしくはたらく。自分らしく生きる。」がスローガンの就活イベント「RAINBOW CROSSING TOKYO 2017」に登壇し、早稲田大学の取り組み紹介として、GS センターの開設の経緯や現在の活動状況等について説明した。就労支援に関わる企業・大学関係者が興味深く聞き入り、早稲田大学の取り組みを幅広く周知できたとともに、イベントを通じて就労支援のニーズの大きさを感じた。

(活動報告：<https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2017/10/26/763/>)

(3) 新宿区「若者のつどい 2017」(2017/12/9 於 新宿文化センター)

ひとくくりにはできない多様性のある新宿の魅力を共有・発信する目的で開催された「若者のつどい 2017」にブース出展した。「ジェンダー・セクシュアリティについて気軽に聞いてみよう」というテーマの元、大学で配布しているチラシやパンフレットを配布したり、来訪した方に GS センターの取り組みについて説明した。セクシュアルマイノリティについて関心がある方や、語学学校に通う留学生、新宿区の議員や地域の方など様々な方に来訪していただき、交流を通じて早稲田大学のスチューデントダイバーシティセンターとしての取り組みに興味を持ってもらえただけでなく、ジェンダー・セクシュアリティに関する理解も深めてもらえるような機会となった。

(4) GID (性同一性障害) 学会 (2018/3/24-25 於 御茶ノ水ソラシティ)

GID (性同一性障害) に関する研究を推進し、知識の交流を通して該当領域の進歩発展に寄与することを目的とした GID 学会に参加した。学会のシンポジウムや研究報告を通して、「性同一性障害」という言葉を巡る議論や、支援者として求められる知識や支援方法など、最新の知見を知ることができた。特に「ユースのための居場所づくり」のシンポジウムでは、ピアサポートの必要性や居場所があることの大切さを実感すると共に、それぞれの支援団体が抱える居場所を維持するための課題(ターゲットに届けるための広報の工夫、場所や料金などのアクセシビリティなど)や、支援者としての知識や態度・役割(ユースにとってのロールモデル、何でも話せる「大人」としての存在)を知ることができた。GS センターでも同様の課題を抱えていることから、既存の支援団体と意見交換をし、今後の GS センターの活動に活かしていきたいと感じた。

4 年間利用者数および利用目的

GSセンターに来室した際に記入させる「受付票」を基に、利用者数や所属、利用目的を集計した（期間：2017/4/1～2018/3/31）。現在の「受付票」では、下記のような質問項目を設定している。なお、「受付票」は日本語版と英語版がある。

来室日時	2017年 月 日 () / 時 分来室	利用回数	1. <input type="checkbox"/> 初めて 2. <input type="checkbox"/> 2回以上
お名前 (ニックネーム可)	所属(学科など)	※その他の場合、該当に○ 保護者・教職員・一般	
利用目的 (複数回答可)	1. <input type="checkbox"/> GSセンターの見学・イベントなどの情報収集 2. <input type="checkbox"/> 書籍利用(閲覧・本の貸出・返却) 3. <input type="checkbox"/> 職員への相談(次の質問にお答えください)	4. <input type="checkbox"/> 学生スタッフと話したい 5. <input type="checkbox"/> グループで利用したい(___名利用) 6. <input type="checkbox"/> その他()	
↑で「3」と回答した方 相談したい内容を 教えてください。	(例:ジェンダー・セクシュアリティに関する情報が知りたい、学生生活で困っている、など)		

※書きたくない、見られたくない場合、記入しなくても構いません。その場合、職員にお声掛けください。

図 4-1 利用者票の質問項目

下記利用者数は利用者票の集計を基に報告する。ただし、利用者票はGSセンターの開設後に作成され、何度か質問項目を改定していることや、未記入のものもあることから、それぞれの報告の総数に若干のばらつきがあることに留意していただきたい。「利用者票」の集計では、2回目以降の来室でも1名としてカウントし、その延べ利用者総数を「利用者数」とした。また、「利用回数」が「1.初めて」とチェックした数を「新規人数」とし、報告と考察を行う。

(1) 利用者数

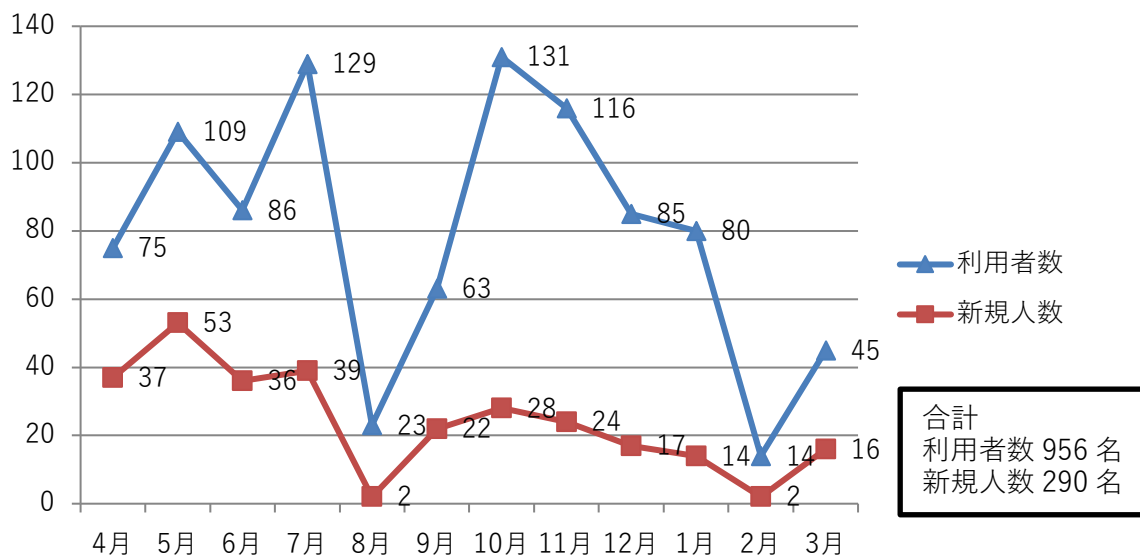


図 4-2 2017 年度利用者数の推移

GSセンターの利用者数は、全体で956名、そのうち新規は290名であった(図4-2参照)。GSセンターが4月に開設され、イベントを通じて多くの来室があった。授業休業期間である8月、9月、2月、3月の来室者数は伸びなかったものの、全体を通して多くの利用があった。新規利用者数の推移に注目すると、前期に月平均40名、後期は月平均20名の来室があり、利用者数も、学期中は平均して100名前後と多くの来室があった。年間を通じて950名近い利用があったうち、コンスタントに新規利用者数がいたことから、GSセンターに対する関心度の高さが分かった。また、新規人数と利用者数を比較すると、リピーターの多さが明らかになったことから、GSセンターが学生にとってのホームグラウンドとして機能していることが考えられる。

■ 利用者の所属内訳

「利用者票」に明記してある所属の内訳は表4-1のようになった。このデータは、2回以上来室している来室者もその都度1名としてカウントしているため、必ずしも所属と関心の高さの関連性を意味づけることはできないものの、GSセンターがある早稲田キャンパスの学生の利用が多く見られた。今後は他のキャンパスの学生にも関心を持ってもらえるようなイベントの企画が必要だろう。

表4-1. 利用者票による来室者の所属内訳 (延べ人数)

所属	人数	所属	人数
政治経済学部	116	創造理工学研究科	32
法学部	52	先進理工学研究科	3
文化構想学部	69	環境・エネルギー研究科	0
文学部	68	情報生産システム研究科	0
教育学部	167	社会科学部	2
商学部	8	人間科学研究科	2
基幹理工学部	1	スポーツ科学研究科	0
創造理工学部	2	国際コミュニケーション研究科	3
先進理工学部	5	アジア太平洋研究科	6
社会科学部	20	日本語教育研究科	0
人間科学部	40	商学研究科ビジネス専攻	0
スポーツ科学部	3	政治学研究科公共経営専攻	0
国際教養学部	39	法務研究科(法科大学院)	0
政治学研究科	4	ファイナンス研究科	0
経済学研究科	0	会計研究科(会計大学院)	0
法学研究科	0	教職研究科(教職大学院)	0
文学研究科	3	経営管理研究科(ビジネススクール)	2
教育学研究科	13	学外・一般	97
商学研究科	0	教職員	47
基幹理工学研究科	0	不明	16
合計			820

(2) 利用目的

GS センターの利用目的は「GS センターの見学・イベントなどの情報収集」が多く、次いで「学生スタッフと話したい」「書籍利用」が多かった。特に書籍利用は年間 248 件あり、貸出件数は 223 冊であったことから、リソースセンターとしての機能を果たしていると考えられる。また、学生スタッフとの談笑も、普段の学生生活の何気ない話から、ジェンダーやセクシュアリティについての話まで、同じ学生の立場で気軽に話せることから、そのニーズの高さがうかがえた。「その他」の利用目的では、イベント参加や休憩室利用、レポート作成など多岐に渡り、様々な目的で GS センターを利用する学生を受け入れることで、居場所づくりとしての機能を果たし、利用者数の増加に繋がったと考えられる。

表 4-2. 利用目的

利用目的（複数回答可）	件数	割合
GS センターの見学・イベントなどの情報収集	325	36%
書籍利用	248	28%
職員への相談	81	9%
学生スタッフと話したい	271	30%
グループ利用	22	2%
その他	195	22%
合計	1,142	

5 取材件数および取材内容

2017年4月より開設されたGSセンターは、国内大学としては初となる、セクシュアルマイノリティ学生とジェンダー・セクシュアリティについて関心のある学生のためのリソースセンターとして注目を浴び、多くの取材や見学依頼があった。以下は2017年度の問い合わせ内容や取材者の所属先をまとめた表である。

表 5-1. 取材者所属

取材者所属	件数	割合
大学生以下	1	1%
大学生・大学院生	10	14%
メディア	7	10%
教職員（学内）	4	6%
学内部署	5	7%
他大学	16	23%
公共団体	10	14%
一般	18	25%
合計	71	

表 5-2. 取材目的

取材目的	件数	割合
取り組み取材・見学	48	58%
職員へのインタビュー	8	10%
イベントへの取材	2	2%
連携依頼	15	18%
講演・研修依頼	7	8%
その他	3	4%
合計	83	

取材者の所属は多岐に渡り、中でも他大学からのGSセンターの見学や取り組み取材を目的とした来訪が多かった。その背景には、本センターが大学の学生支援部署として国内で初めて設置された点にあり、その設立の経緯や運営などについての意見交換をすることで、同じ大学組織として様々な情報共有ができた。また、一般企業や地方公共団体からの取材・見学も多く、連携依頼やフライヤーの設置など、たくさんの外部リソースを共有していただいた。これらの取材を受けることを通じて、GSセンターのミッションやビジョンを広く知っていただけただけでなく、イベントへの協力や共催実施や、リソースセンターとしての連携を図ることができたと考えられる。

■ 取材記事

- ・日本経済新聞 『早大、LGBT対応に本腰 トイレや呼び方など配慮』 (2017/4/8)
(URL: https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG06H5B_Y7A400C1CC0000/)
- ・早稲田ウィークリー 『性的マイノリティ学生を支援「GSセンター」発足、出席簿の性別欄廃止…早大、取り組みを制度化』 (2017/4/24)
(URL: <https://www.waseda.jp/inst/weekly/feature/2017/04/24/24844/>)
- ・早稲田ウィークリー 『WASEDA LGBT ALLY WEEK で早稲田が虹色に 牧村朝子さん講演会「百合のリアル、知りたくない？」も開催』 (2017/6/2)
(URL: <https://www.waseda.jp/inst/weekly/attention/2017/06/02/28401/>)
- ・毎日新聞 キャンパる 『輝け、虹色の笑顔 早稲田大LGBT支援センター』 (2017/6/9)
(URL: <https://mainichi.jp/articles/20170609/dde/012/070/025000c>)

- ・HUFFPOST 『早稲田大学が「ダイバーシティ推進宣言」なぜこのタイミングなのか、LGBT 学生支援センターの課長に話を聞いてみた』 (2017/7/12)
(URL : https://www.huffingtonpost.jp/soushi-matsuoka/waseda-university-lgbt-diversity_b_17455674.html)
- ・週刊朝日 AERA dot. 『早稲田大が始めた日本初の「LGBT センター」の存在感』 (2017/7/15)
(URL : <https://dot.asahi.com/wa/2017071400068.html>)
- ・早稲田ウィークリー 『IVAN さん「『性的マイノリティー』は社会の中心でキラキラしている」 早大広研「1/13 プロジェクト」を開催』 (2017/7/19)
(URL : <https://www.waseda.jp/inst/weekly/attention/2017/07/19/31955/>)
- ・CAMPUS NOW 『早稲田大学 GS センター 多様な「性のあり方」が認められる文化をつくる GS センター』 (2017/8/31)
(URL : <https://www.waseda.jp/top/news/53486>)
- ・早稲田ウィークリー 『日系米国人・LGBT…差別をどう乗り越えたのか? ジョージ・タケイ氏、早大で語る』 (2017/11/29)
(URL : <https://www.waseda.jp/inst/weekly/attention/2017/11/29/38601/>)
- ・早稲田ウィークリー 『「マキさんの老後」のマキさん、GS センターを訪問 12/10、BS フジでシリーズ総集編』 (2017/12/5)
(URL : <https://www.waseda.jp/inst/weekly/attention/2017/12/05/38875/>)
- ・College Cafe 日経電子版 『早大レインボー(1)私が LGBT のサポート活動に取り組む理由』 (2018/2/9)
(URL : <http://college.nikkei.co.jp/article/110572017.html>)
- ・College Cafe 日経電子版 『早大レインボー(2)学生スタッフ対談(上)GS センターってどんなところ?』 (2018/3/13)
(URL : <http://college.nikkei.co.jp/article/111801917.html>)
- ・College Cafe 日経電子版 『早大レインボー(3)学生スタッフ対談(下)これから GS センターでやりたいイベントは?』 (2018/3/26)
(URL : <http://college.nikkei.co.jp/article/112331210.html>)

6 相談件数および相談内容

GS センターでは「ジェンダー・セクシュアリティについて安心して相談できる居場所」として、ジェンダー・セクシュアリティに関する知識のある専門職員が可能な範囲で相談支援をしている。対応内容として、来談者の話を傾聴し、必要に応じて学内関係部署の紹介あるいは連携を図ることで対応したり、外部機関に繋げたり、個々のニーズに応じた対応を可能な限り行っている。

GS センターが開設した 2017 年 4 月から翌年 3 月までのおよそ 1 年間における相談人数は、延べ人数で 104 名だった（期間：2017/4/1～2018/3/31）。そのうち、相談内容を「ジェンダー・セクシュアリティに関する悩み」、「大学・制度に関する問題」、「人間関係の悩み（家庭・友人・教員との関係）」、「情報収集」、「研究相談」、「ハラスメント」、「職場・バイト先の問題」、「外国人学生の悩み」の 8 項目に分類した。1 回の相談につき複数の相談分類を含む場合は、複数とカウントを行ったところ、下記のような件数となった。

表 6-1. 相談内容の分類と件数

相談内容（分類項目）	件数	割合
1 ジェンダー・セクシュアリティに関する悩み	43	27%
2 大学・制度に関する問題	19	12%
3 人間関係の悩み（家庭・友人・教員との関係）	40	25%
4 情報収集	18	11%
5 研究相談	7	4%
6 ハラスメント	18	11%
7 職場・バイト先の問題	8	5%
8 外国人学生の悩み	5	3%
合計	158	

相談件数として最も多かったのは「ジェンダー・セクシュアリティに関する悩み」であり、内容としてはセクシュアリティのことや、ジェンダーロールへの疑問や違和感など様々であった。次に多かった相談は「人間関係の悩み」であった。セクシュアルマイノリティ当事者であるかどうかに関わらず、ジェンダーやセクシュアリティに関心があることで、普段のちょっとした会話での違和感や悩みを抱える学生も多いことが分かった。他にも、ジェンダー・セクシュアリティの悩みの有無に関わらず、家庭や友人関係などの悩み相談も多かった。次いで「大学・制度に関する問題」として、現状の大学の戸籍・性別情報の取り扱いに関する質問や、健康診断の受診に関する疑問などがあった。「情報収集」としては、職員へのインタビューやジェンダー・セクシュアリティに関する質問など様々だった。こうした相談人数や相談件数の多さから、早稲田大学の多くの学生が悩みを抱えていることが分かった。

7 次年度に向けた課題と展望

(1) 課題

GSセンターは2017年4月に開設され、今年度1年間対応していく間で多くの課題が見つかった。今年度はダイバーシティ推進室と連携して、名簿及びCourse@Navi（授業支援ポータル）の性別情報の削除や、学内への啓発を行った。気づいた課題は多く、改善のために関係各所と連携をしたものの、すぐに改善できないハード面の課題は未だに多い。以下にその課題と理由について述べる。

- ① 施設面における課題：GSセンターがある10号館にはエレベーターがなく、2階にあるセンターにアクセスすることができない方がいる。
- ② 外国語対応における課題：英語やその他外国語に対応できる職員が十分におらず、イベント運営や相談になった際、留学生への支援が不十分になる。
- ③ 人員体制における課題：センター開室中は非常勤嘱託職員1名と学生スタッフ1名の2名で運営しているため、相談や来室対応に限界がある。
- ④ スペースにおける課題：安心できる居場所を求めるセクシュアルマイノリティ学生への閉じられた空間である部屋であると同時に、オープンなコミュニティスペースであることを両立することの難しさが常に課題となった。

これらの課題はすぐに解決できるものではなく、大学の施設や人事にも関わる課題であると感じている。これらの課題の解消に繋がるかは不明だが、今後GSセンターが活躍していくことにより改善されていくことを期待したい。

(2) 次年度の展望

開設して1年間の間に学内他箇所との連携や学生からの声を通じて、次年度に具体的に取り組むことができそうなプロジェクトを「展望」とし、以下にその内容を紹介したい。

① 「セクシュアルマイノリティ学生のためのサポートガイド」の充実

早稲田大学ではセクシュアルマイノリティ学生のためのガイドは特に作成されておらず、これまで、学生個人の困り事や必要な配慮に関して、学生個人がそれぞれに対処してきた。このような困り事や困難を解消すべく、学内各所への調査により実態を把握することにより、必要なリソースや対応を集約した「セクシュアルマイノリティ学生のためのサポートガイド (Ver. 1)」を2018年3月末に公開した (<https://www.waseda.jp/inst/gscenter/news/2018/03/29/1152/>)。

今回のVer.1では「1. 相談に関すること」、「2. 氏名・性別の情報とその管理について」、「3. 学生生活について」の情報を開示した。今後も困難場면을解消しガイドを充実させるために、関係各箇所と継続した連携を図りながら、大学におけるジェンダー・セクシュアリティのバリアフリー化を目指したい。

② GSセンターのミッションの維持（相談機関・リソースセンター・居場所づくり）

今年度開設してから956名もの学生の来室があり、そのうちの約1/10が相談に関するものであった。また、図書利用も248件あったことから、GSセンターのミッションは大変重要なものであることを改めて実感した。今後もこのミッションを維持し、学生が満足できる環境づくりに専念したい。

③ 学生、教職員への意識向上、啓発のための活動

今年度は多くのイベントを開催し、ジェンダー・セクシュアリティに関する意識向上や啓発活動が実行できたと考えられる。しかし、その一方、教職員への啓発活動はあまり行うことができず、それにより教職員から相談も何件かあった。今後は、学内教職員への啓発活動を行うダイバーシティ推進室とも連携し、学生対応をする教職員全体への幅広い啓発活動に取り組んでいきたい。

④ 校友会（LGBT 稲門会）との連携体制構築

今年度は、セクシュアリティとキャリア形成に悩むセクシュアルマイノリティ学生に参加を限定し、「LGBT 就活交流会」を実施した。キャリア形成に悩むセクシュアルマイノリティ当事者は少なくなく、大学組織としてセクシュアルマイノリティ学生のキャリア支援にも注目する必要があると感じた。次年度も、早稲田大学のセクシュアルマイノリティ当事者の卒業生で成り立つ「LGBT 稲門会」と連携し、キャリア支援にも力を入れていきたい。

8 学生スタッフの声

「GSセンターでの活動を通じて」

学生スタッフ：うっちー

こんにちは。学生スタッフのうっちーです。今日は1年間の学生スタッフとしての活動を振り返った内容についてお話ししたいと思います。

私が学生スタッフ採用の知らせを受けたのはちょうど去年の今頃でした。就職活動の最中で将来に不安を抱きつつ、GSセンター開室に携わることができる喜びに胸を高鳴らせていたことをよく覚えています。それまでの私はハワイ大学留学中にできた友人がたまたまLGBT当事者とわかったこと、沖縄系移民の文化保存に携わったことや日本人居住者向けタウン誌でライターのインターンをしていたことをきっかけに、社会でマイノリティであること、その支援者になることについて漠然と考えていました。それから一度、日本社会の声なき声を発信する仕事として沖縄でジャーナリストとなることを志し、インターン生として参加したメディアの取材活動を通しいかにして日本でもLGBTに関する活動が盛んになっているかを目の当たりにしました。そして幸運にも自分の一番身近な環境、早稲田で次年度から学内施設としてGSセンターができると知り自分で学内外のマイノリティを支えることがしたいと思い応募に至りました。

この1年間、GSセンター全体としてのイベント運営を手伝いながら週一度の自分の勤務日には個人イベント企画を任せていただき、早大生・一般の方々が来室した際にはお話しさせていただくこともありました。春の東京レインボープライドのGSセンターブース出展・パレード行進では道行く人が早稲田のLGBTへの取り組みを応援してくれることを自分のこれからのモチベーションとして受け止め、季節ごとに開催したトークショーでは動員人数が増えるにつれGSセンターの発信力の成長に興奮や期待を感じました。個人企画としては企業が新卒採用に関してLGBTに向けて行っている取り組みをアンケート調査し、またLGBT当事者として働く社会人の方をお呼びして講演をしていただくことを手がけてきました。これらの業務を通して、誰もが自分の愛着を感じる文化や性的指向といったアイデンティティを表現することは尊重されるべきだと一層強く思うようになりました。ただ同時に、その表現のオリジナリティを当たり前を受け入れる土壌を作ること、いわば目に見えない社会インフラがまだまだ世の中で必要であると実感しました。例えば、GSセンター内でも様々な背景のある人が来室しますが会話が盛り上がると、ふと「男の考えといえば～」、「ゲイだから～」というようにある現象を属性特有のものとしてひとまとめにしてしまうシーンを見聞きしたことがあります。また、GSセンターは当事者性を問わず誰でもLGBTやジェンダーの情報へのアクセスや交流が可能な場所ですが、利用者の中で「知人に見られたらなんとなく気まずい」と言ってGSセンター前の廊下の様子を伺って出入りする人もいます。スタッフとして、気がかりな発言にはそれとなく根拠を伺い問題点を明確にすること

を大切にすべきだと思います。しかしおそらく問題点の出所は利用者自身ではなく、GSセンターの外の社会なのです。

GSセンター自体やLGBT人口の多さがまだ学内・社会で浸透しきっていない存在であることを踏まえて、私はGSセンター=LGBT当事者オンリーというバイアスの解消、そして性的指向のカミングアウトは単なる”嗜好”の表現や本人の楽しさとしての選択ではなく、生きていく上での本質だということが説明される必要を感じています。というのも、誰と一緒にどう生きていくかは既存の人間関係や社会保障にまで影響を及ぼすからです。

私は島や海辺に旅行をするのが大好きです。その縁から卒業後は沿岸のインフラ開発に携わる仕事に就く予定です。こうして考えると、何か個人とは島のように、それぞれの島は固有の地形や歴史の文脈を持つ存在であるように感じます。ただ、島同士の距離や景色、文化の違いを理由に争いや断絶が起きてしまったらさみしいなあ、と思います。そう考えると私はGSセンターが、この先時間がかかっても様々な人や物の交流を通してのイノベーションの誕生や、非常時の支援を担う架け橋、港、灯台として社会に馴染むインフラになったらいいな、と思います。

私は最初、言葉にしづらい・自覚しづらい状況を抱える誰かのために働こうとした訳ですが、正直なところ自分がその人たちの助けになれたのかはわかりません。ただ、自己実現しようとすることを通してたくさんのお会い、特に目標としていきたい方々や悩み、喜びを分かち合える仲間にも恵まれたことは自分の中の財産となって卒業後もLGBTについて関わっていく動機となると思っています。私の今の夢はキャリアとして世界の物的インフラ構築に携わりながら、業界LGBT当事者・支援者ネットワークを立ち上げることです。スタッフとしての1年間、皆様にはお世話になりました。ありがとうございました。

「GSセンター」

学生スタッフリーダー：いつき

大学1年生の時は、自分がまさかセクシュアルマイノリティの支援に携わることになるうとは思っていませんでした。それどころか、その頃の私は自分のセクシュアリティさえ意識していませんでした。

私が己のセクシュアリティについて疑問を持ち始めたのは1年次の終わり頃だったかと思えます。最初は「疑惑」でしかなかったその思いも1年も経たないうちに確信に変わり、それからというもの友人や家族との日常生活の中で息をするように交わされるヘテロノーマティビティやホモフォビアがただただ苦しく、スクールカウンセリングに駆け込んで余計に傷つくこともあり、身近な人には誰にもカミングアウトできないでいました。自分

の心の柔らかいところがじわじわと硬くこごっては錆びついて崩れていって、自分が誰だかわからないような感覚だったのを覚えています。

そんな自分が変わることになったきっかけがイギリスへの留学でした。留学先では、クラスメイトにオープンリーゲイがいたり、日常会話の中で”Do you have a boyfriend or girlfriend?”と聞かれたり、安心してカミングアウトする環境が整っていました。留学先の友人の1人にカミングアウトした後に、「ホモフォビアに直面しても、私は怖くて何も言えない」とぼやいたところ、「何でだよ、怒りたい時にはもっと怒れ！」となぜか私が叱られて、頭にきた私は「怒った時に返り討ちにされるリスクがあるのはお前じゃない、俺だ！」と言い返してしまい、そこからは朝まで涙混じりの喧嘩をしたこともありました。でも言いたいことを言い尽くすと確かにスッキリして、彼の言葉の通り怒りたい時には怒ることの重要性を知りました。

彼の助言が活きたのは、留学後に参加した、アイスランドでのサマーキャンプでした。サマーキャンプというのは、数週間10名前後の若者が共に寝泊まりしながらボランティア活動に従事するという内容のもので、ヨーロッパの若者の間ではよく知られた余暇の過ごし方の一つです。そのスケジュールの一番最初の自己紹介時に事件が起こりました。参加者の1人が自分の特徴を尋ねられた時に、冗談めかして「俺はヘテロセクシュアルだ」と言い出し、周囲はクスクスと忍び笑いしながら「そんなのみんな同じだよ～」と言い合っていました。その瞬間に頭の奥がスッと冷えていって、「怒りたい時には怒れ」という例のアドバイスが脳内に反響しました。気がついたら私は立ち上がって、「いや、私は同性愛者だから」と彼の目の前で言っていました。脚が震えていたけど視界は冴えていて、泣き出しそうだけど自分が誇らしく思えたあの瞬間を今でも覚えています。その時はみんなバツが悪そうにしている、今振り返ってみれば、大分乱暴なことをしてしまった自覚があります。でも私はその時のことを全く後悔していません。というのも、その時その場にいた私以外のメンバーの1人にレズビアンがいて、キャンプの最後に彼女がカミングアウトしてくれたと同時に「あの自己紹介の時、イツキがああ言ってくれてよかった」と言ってくれたからです。

前置きが随分と長くなりましたが、アイスランドでの経験が私にとって、(図らずも)自分以外の当事者をエンパワメントした最初の機会でした。そして日本に帰国してからは、差別に抗したり、当事者の支援をしたりしたいと考えているうちにGSセンターにたどり着きました。それ以降は、いち利用者として、日常で感じる疑問や学内の差別について共有したり、それを具体的に解決する方法を考え出したりする機会に恵まれました。GSセンターにいる時は、自分のセクシュアリティやジェンダー・アイデンティティを誰かに決めつけられることもなく、ようやく心安らぐ居場所ができました。もっと早く、私が己のセクシュアリティに悩んでいた頃に、GSセンターが早稲田大学にあったとしたら、きっと救われる部分はもっと多かったのだろうなと思います。GSセンターのスタッフ間では「GSセンターは心の保健室」というイディオムが内輪ネタとして存在しているのですが、その表現は非常に的確に感じます。

しかしGSセンターも万能薬ではなく、例えば「シスヘテロは～～」「ゲイは～～」のように、スタッフがジェンダーやセクシュアリティについてステレオタイプカルな物言いを

してしまうこともあります。それ以上に残念なことには、利用者やスタッフから、エスニシティや障がいなど、特定の属性を持つ人々に対して差別とも取れるような物言いを聞いたことがあります。差別に抗するための機関である GS センターでそのような言動が行われてしまったことがショックでしたが、しかしその時私はそれ以上に、そんな場面を前にして何もできなかった自分自身に対して、一番失望していたのかもしれない。実際それ以外にも、自分が犯してしまった失態は数知れません。自分が学生スタッフとして 10 月から働き始めてからというもの、他の利用者とジェンダーやセクシュアリティに関して話すたびに、自分の物言いや考え方が、いかに世の中のステレオタイプに縛られているかを思い知らされてきました。例えば、利用者と家事について話している時に、「家でご飯を作っているお母さんは～～」と言ってしまったことがありました。こういう時は、「家でご飯を作る人は～～」のような、もっとインクルーシブな言い方があるはずでした。

GS センターの負の面にばかり注目してしまいましたが、私はこれらの現象をネガティブなこととしてだけ捉えるつもりはありません。つまり、真面目なトピックについて、誰かと共に考える機会と場所を与えてくれるというのも GS センターの側面なのであるという風に考えたいと思っています。実際、他の属性に対する差別発言については、スタッフ全員で集まって対応を考えるイベントを私自身で企画・実施しました。自分自身のステレオタイプについても、他の学生スタッフや職員の方と「この発言には後悔している」「次はこういう言い方を心がけたい」「それじゃあ今後起こりそうな例を考えよう」というように、建設的な話をするきっかけになりました。似たような例は私が体験した以外のものもあり、このような種々のボトムアップの蓄積を通じて、GS センターもこれからどんどん良い方向に変わっていくと思います。

色々な種類の差別や偏見といったトピックを大真面目に話す土壌がある環境は残念ながらまだまだ身の回りには少なく、その意味で GS センターはやはり希少で貴重な場所だと思っています。アクティブに考えながら学ぶ場を提供するという機能こそが GS センターの一番の強みではないかとさえ、最近は思います。

GS センターで吸収したことは数え切れません。理不尽に No を言う勇気、異なる立場の人との対話の重要性、様々なマイノリティに対する配慮の方法、己の力で問題を解決するパワー……これらを糧に、4 月から始まる社会人生活を楽しみながら乗り切ると共に、雲行きが不透明なこの 21 世紀を生き抜こうと思います。GS センターでお世話になった全ての方に、この場を借りて今一度お礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

おわりに

「多様性について考えた一年」

日本国内では先進的な取り組みであるこのGSセンターの開設に携わって、当初は気負いばかりが先行していました。

「このセンターで自分は何をすべきか」

そのことばかりが頭をもたげていたように思います。

そんな個人的な考えはまともらずとも開室日を迎えるわけですが、この場所を必要として訪れてくれる学生たちを目の前にしてそうした思いは徐々に変化していきました。

「目の前の学生が困っていることに職員としてどう向き合うか」

大学の職員としては当たり前のことかもしれませんが、GSセンターで出会った学生たちを通じて私ははじめてそのことに向き合い、考える時間を持てたように思います。

「誰もが'多様な性'の中の1人 Everyone has their own colors」

これはGSセンターのホームページに掲げている言葉ですが、この一年で「多様性」という言葉のとらえ方についても変化がありました。

色に例えるなら、いろんな色があることを予め漠然と知っていることではなくて、個々の色と出会いひとつひとつを知っていくこと、その色がその色のまま在るためにはどうすればよいか悩むこと、その積み重ねや時間の中にあると今では考えるようになりました。

振り返ればこの一年は、開設初年の話題性も相まって外部からの要請に応えることで精いっぱい日々でした。そんな日々の中でセンターの活動の核となる流れをつくってくれたのは、センターの取り組みに呼応してイベントに参加してくれた方々、そして何より具体的な声を聴かせてくれた来室者でした。

続く一年は、そうした方々がつくってくれた小さな流れを少しずつ豊かに広げていければと思っています。

GSセンター専任職員 布施 直人

「この一年間を振り返って」

もう10年も前になるが、早稲田とは大学生時代から深い繋がりがあったように思う。私がかつて所属していたインカレサークルは、早稲田の公認サークルGLOWや、qoonとの交流もあり、「関東セクシュアルマイノリティネットワーク」と題して関東のセクシュアルマイノリティのサークル同士が連携できるような団体としても携わっていた。そんな中、2015年に早稲田大学で「LGBTセンターを作る」というプレゼンが総長賞を受賞したことは、私の耳にも届き、「そこで働けたらどんなにいいだろうか」と「夢」に思いを馳せていた。今まさに、その憧れていたセンターで働いているというのは自分にとっては、これ以上ない幸せだと思う。

GSセンターで働いた一年間は、「夢」を現実にかに落とし込むかの葛藤の連続であった。学内制度や、学生からの相談、イベント企画や調整など、現実的な仕事としての能力やスキルを考えさせられ、学ばせてくれる機会でもあった。ジェンダー・セクシュアリティについて、制度を整え、啓発をしていくというのは、いくつもの「限界」とされているものを超える必要があった。ジェンダー・セクシュアリティに係る支障については、大体が「想定されていない」「前提とされていない」ということにある。それらの「課題」を整理し、可視化することで初めて「こんな支障があるのか」ということが分かる。実際、掘り起こしたニーズは、1年間の来室者の数や、相談件数、イベントの結果にある通りだ。「夢」を具現化する機会を与えられ、試されている中、来年度もまだまだたくさんの「見えないもの」を「見えるようにする」作業が残されている。来年度も、「ダイバーシティ」を真の意味で推進するべく、邁進したい。

GSセンター専門職員 大賀 一樹

「開設1年目を振り返って」

これまでの私は「自分のように悩んでいる子に寄り添いたい」と教員を目指していたものの、「自分のセクシュアリティをカミングアウトして採用されなかったらどうしよう」と常に不安で、カミングアウトをせずに就労をしていました。子どもと接している間、真正面から向き合っていきたいのに「カミングアウトができないこと」が、まるで「嘘」をついているようでつらかったことを、強く記憶しています。この先の人生、どう働くか・生きていくかを悩んでいる矢先、早稲田大学の友人たちが発案した「LGBT 支援センターを作る」という企画が総長賞を取ったと聞き、そんな場所で働けたらどんなに幸せだろうと思っていました。

2017年4月にGSセンターができるにあたり職員として採用され、これまで社会人としてもクローゼットで生きていた自分だからこそ、今度は全てをさらけ出し、とにかく目の前の学生に寄り添いたいと思って働きました。いざ開室してみると、毎日のように来室があり、明確なニーズがある学生もいれば、ただおしゃべりを楽しむ学生、本をじっくり読んでいる学生など、様々でした。それぞれがリラックスをして好きなことができる居場所だからこそ、たくさんの声を拾い上げることができました。GSセンターの職員として何ができるかといえば、その声を拾い上げ、制度面のバリアや心のバリアを解消していくこと、そしてこの居場所を守り続けることに尽きると思います。GSセンターが起点となり、関係各所と連携することで、初年度は少しずつではありますが、変えていくことができました。制度面でのバリアはもちろん、心のバリアを解消していくべく、次年度も尽力していきたいと思っています。

GSセンター専門職員 渡邊 歩

早稲田大学 GS センター活動報告書 第 1 号

2018 年 4 月 発行

編集・発行者 早稲田大学 GS センター

問い合わせ先 gscenter@list.waseda.jp

ホームページ <https://www.waseda.jp/inst/gscenter/>

無断コピーおよび無断転載を禁じます。コピー・転載・引用等される際には、
必ずメールにてご連絡いただきますようお願いいたします。
